

## 男子学生ハンドボールにおけるシュートリバウンドボールの検討

### Analysis of rebound ball in men's college handball

岡 本 大\*, 澤 田 俊 祐\*, 内 田 沙 智\*, 吉 田 久 士\*\*

Dai OKAMOTO \*, Shunsuke SAWADA \*, Sachi UCHIDA \*  
and Hisashi YOSHIDA\*\*

#### ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate characteristics of rebound ball from shot miss in men's college handball. The games analyzed in the study were ten games of men's intercollegiate handball championship in 2001. The analysis of the games was carried out by making use of the pictures from videos.

The results were summarized as follows.

- (1) Each team has to design offense every one minutes.
- (2) The rate of success of the fast break was higher than that of the set offense.
- (3) Of the total number of miss shots, 30% rebounded to the playing area and 22% rebounded to the field.
- (4) The rate of the rebound ball on opposite side of the shots from long distance was higher than that on same side.
- (5) Of the rebound ball in the field, 48% was used for the fast break.

*Key words; handball, rebound, analysis*

#### I. はじめに

球技スポーツは大きく4つに分類され<sup>3)</sup>、ハンドボールはその中のゴール型の種目に属し、複数のプレーヤーによって目的を遂行するチームスポーツである。試合においてチームが最高のパフォーマンスを発揮するためには、個々のプレーヤーが所有している技術、体力を最大限に生かせるような、チームとしての戦術がなければならない。

戦術を決定するにあたっては、ヤーン・ケルンが「できる限り多くの、そしてできる限り客観的な情報を利用しなければならない」<sup>6)</sup>と述べているように、戦術上の決定を下す根拠や判断基準となるデータが必要となってくる。データを収集する有効な手段の一つにゲーム分析がある。水上ら<sup>4)</sup>は、第12回世界女子ハンドボール選手権のゲーム分析から、日本女子チームの1試合平均攻撃回数は62.7回で、1995年の男子世界選手権より多くな

\* 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科 (Graduate School of Sport System, Kokushikan University)

\*\* 国士舘大学体育学部ハンドボール研究室 (Lab. Of Handball Human, Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

っていること、さらにはセットオフenseにおける日本チームのシュート成功率は対戦国と比べ約15%も劣り、ロングシュートの成功率は20%も低かったことを報告し、競技にフィードバックしている。ハンドボールにおける速攻攻撃については笹倉ら<sup>5)</sup>が、第19回IHFトレーナーシンポジウム報告のまとめから、年々速攻によるゴールの割合が増していることを報告している。犬塚ら<sup>2)</sup>は速攻を試みたときの攻撃開始局面について分析し、速攻全体の約55%が相手シュートミスにより攻撃権を獲得し、速攻を開始したものであり、シュートミスボールからの速攻は、その約4割がリバウンドボールとしてプレイングエリアに跳ね返ってきたものからであると報告している。すなわちこれは、速攻を開始した局面において、どのように相手からボールを獲得したかは、全体の約25%がリバウンドボールであったことを示している。このことから、ハンドボールにおいてリバウンドボールの処理は、速攻への展開、また相手に再攻撃の機会を与えないという意味で重要であると考えられる。前述のようにシュートや得点、ミスについては分析がなされてきたが、このリバウンドボールの特徴を捉えた研究はみられない。そこで本研究では、ハンドボールにおけるシュートリバウンドボールに着目し、シュートされた地域やシュートの種類、ボールがリバウンドした地域の視点からその性質を把握し、競技力向上に役立てることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 分析対象

本研究では、平成13年度全日本学生ハンドボール選手権大会男子の部の10試合を対象とし分析をおこなった。

### 2. 分析方法

試合をVTR撮影したものから攻撃場面を再生し、後述の分析項目を抽出した。シュートエリア

およびボールリバウンドエリアは、ハンドボールコートの半分を、ゴールラインとフリースローラインを基準に図1に示す15分割にして調査した。

### 3. 分析項目

- (1) 攻撃内容
- (2) 攻撃およびシュート成功率
- (3) シュートエリア (図1 参照)
- (4) シュートリバウンドエリア (図1 参照)
- (5) シュートミス後の展開

## III. 結果

### 1. 1試合の攻撃内容

1チームの1試合あたりの攻撃内容を表1に示す。1試合の攻撃回数は56.2回で、ハンドボール

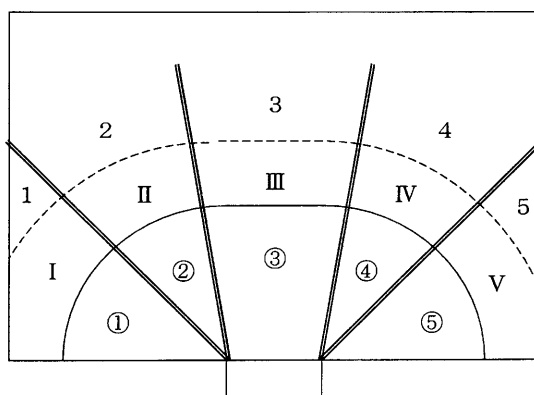


図1 シュート及びリバウンドエリア

表1 1試合における攻撃内容

	1 試合平均
攻撃数	56.2±4.4
得点数	19.3±4.4
攻撃成功率 (%)	34.4
シュート数	40.7±5.3
シュート成功率 (%)	47.5
シュート到達率 (%)	72.4
ミス数	15.5±3.5
ミス率 (%)	27.6

競技の試合時間60分を考慮に入れると、約1分に1回の割合で攻撃がなされていた。また得点数は193点で、攻撃成功率は34.4%となり、約3回に1回の割合で攻撃は成功していた。1試合のシュート数は40.7本で、攻撃の約7割はシュートまで到達していた。一方残りの約3割の攻撃がミスで終了していた。

## 2. 攻撃およびシュート成功率

10試合全体での遅攻、速攻の攻撃回数をみると、遅攻が843回、速攻が280回で全体の75%を遅攻攻撃が占めていた（表2）。それぞれの攻撃の成功率は、遅攻の成功率32.0%と比べ、速攻は41.4%と高値であった。また、シュート成功率に着目してみると、遅攻の42.4%に対し、速攻は58.1%と約15%シュート成功率が良かった（表3）。

表2 攻撃方法ごとの攻撃成功率

	攻撃数	得点数	成功率(%)
遅攻	843	270	32.0
速攻	280	116	41.4

表3 攻撃方法ごとのシュート成功率

	シュート数	得点数	成功率(%)
遅攻	583	247	42.4
速攻	186	108	58.1

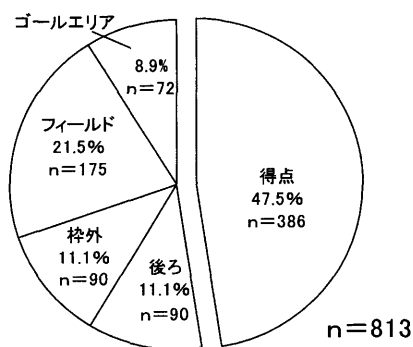


図2 シュート内容

## 3. シュート内容

図2は試合においてなされた全シュートの内容を示したものである。成功したシュートは47.5%であり、約5割は失敗に終わっていた。失敗だったシュートの内、後ろもしくは枠外になったものは22.2%あった。約3割はシュートがリバウンドボールとしてコート内に転がってきた。特にフィールドにリバウンドしてきたものは21.5%あり、シュート5本に1本は攻撃側守備側どちらのボールとなるかわからない状態になっていた。

## 4. シュートリバウンドエリア

### (1) 全シュートリバウンドエリア

リバウンドしたボールの行方をエリアごとにみたものが図3である。リバウンドボール全体の内、ゴールエリアライン内には29.0%がリバウンドしていた。またゴールエリアラインをこえてフィールドには70.4%がリバウンドしていた。ゴールエリアライン内のリバウンドボールは、中央③のエリアにほとんどが転がっていた。フィールドにリバウンドしたボールは、中央Ⅲのエリアが20.2%で最も高く、次いでⅡが15.4%、Ⅳが14.2%となっていた。

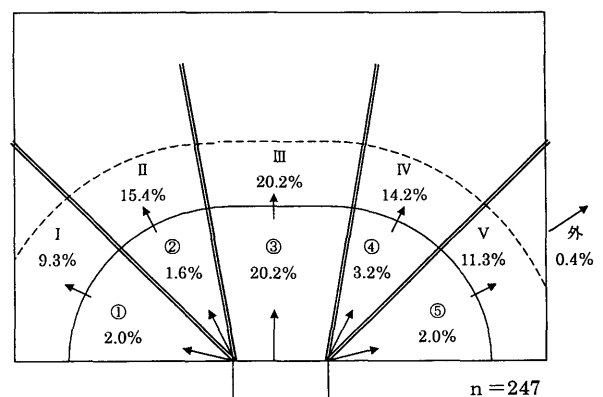


図3 全シュートリバウンドエリア

(2) シュートエリアごとに見たフィールド内リバウンドエリア

I のエリアからのシュートによるリバウンドボールは、V のエリアに27.8%と最も多く転がっていたが、I・II エリアにそれぞれ22.2%とフィールド全体に転がっていた (図4)。II のエリアからのシュートによるリバウンドボールは、その約半数の45.5%がII のエリアに転がっていた (図5)。III のエリアからのシュートミスからは、II とIII のエリアに33.3%リバウンドしており、I のエリアの22.2%をあわせて考えると、コート片側に偏ってリバウンドしていた (図6)。IV のエリ

アからのシュートによるリバウンドボールは、III とV のエリアにそれぞれ30.8%と多く転がっていた (図7)。V のエリアからのシュートによるリバウンドボールは、III とIV のエリアにそれぞれ35.7%と多く転がっていた (図8)。エリア2・3・4からの遠距離シュートによるリバウンドボールの行方を示したものがそれぞれ図9、図10、図11である。2からのシュートでは、コート全体にボールがリバウンドしていたが、若干シュートエリア側 (エリアI・II) より反対側のIVとVのエリアに多くリバウンドしていた。中央のエリアIIIからのシュートによるリバウンドボールは、IIIの

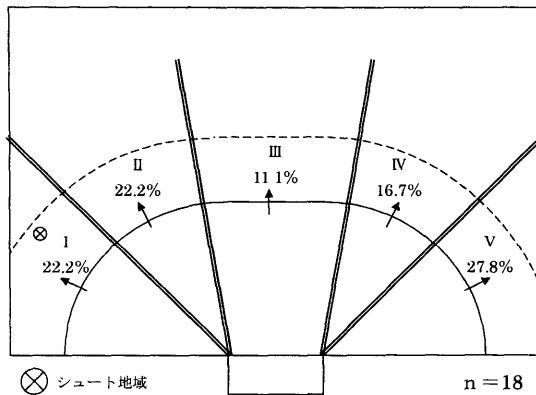


図4 I からのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

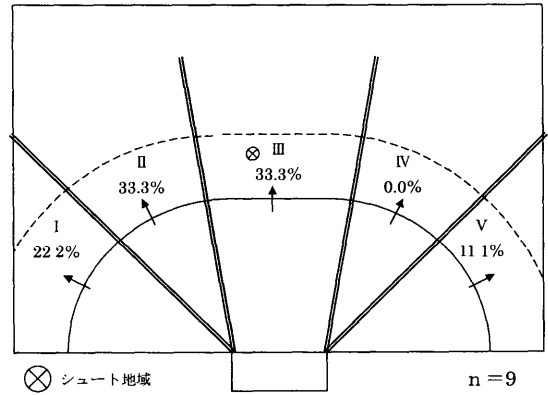


図6 IIIからのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

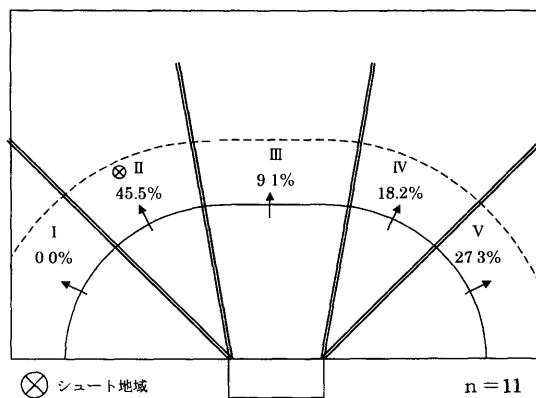


図5 IIからのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

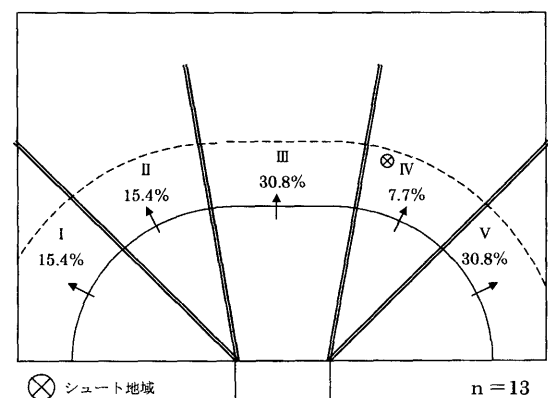


図7 IVからのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

エリアに43.6%と大変多くリバウンドしていた。エリア4からのシュートでは、シュート側のエリアⅣ・Ⅴの30.3%より反対側のエリアⅠ・Ⅱが45.5%と多くリバウンドしていた。

### 5. シュートミス後の展開

相手のシュートミスにより獲得した攻撃権を、ボールの所持状況によりその後どのように攻撃を展開していったか分析した結果を示したものが表4である。シュートミスによりゴールエリアにボールがリバウンドした場合、攻撃は72回中52回速攻に展開されていた。またフィールド内にリバウ

ンドした場合も175回中84回と約5割速攻に展開していた。しかし、一方で49回、約3割は相手にボールがわたり再攻撃権を与えていた。後ろにボールが転がったり、枠外にシュートがなされた場

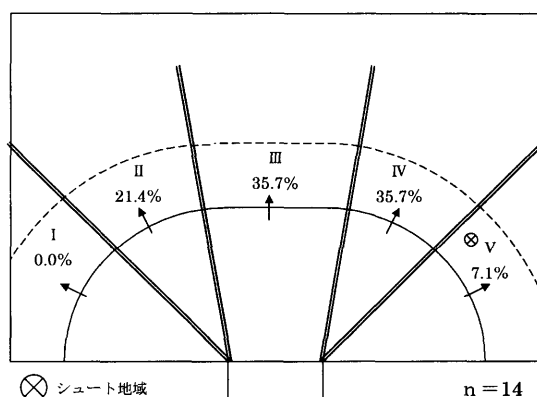


図8 Vからのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

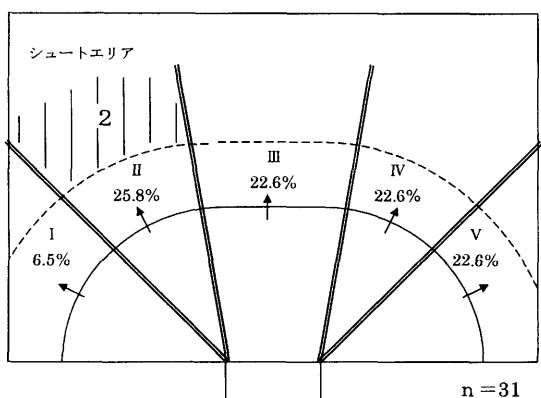


図9 2からのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

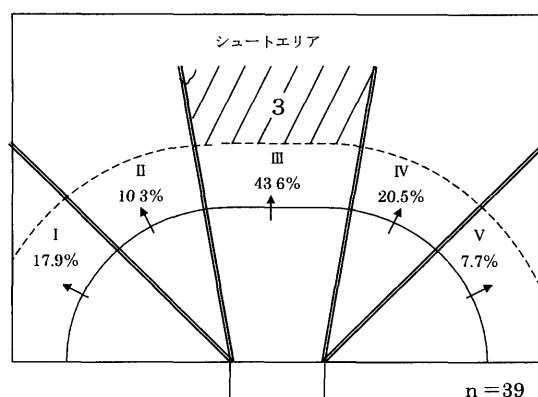


図10 3からのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

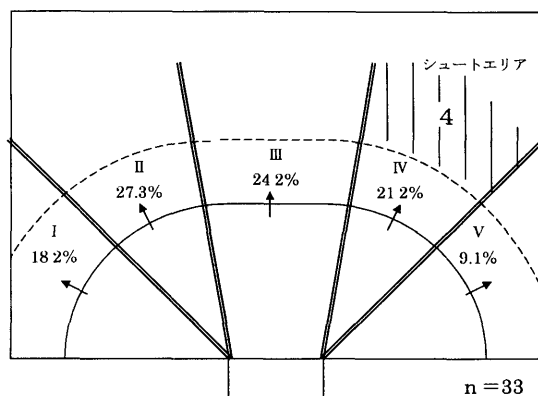


図11 4からのシュートにおいてゴールエリアを越えたリバウンドエリア

表4 シュートミス後の展開

	速 攻	遅 攻	再攻撃	合 計
ゴールエリア	52	18	2	72
フィールド	84	42	49	175
後ろ	42	48	0	90
枠外	39	51	0	90
合計	217	159	51	427

合、攻撃展開は速攻より遅攻のほうが多かった。

#### IV. 考 察

1 チームの1試合の攻撃回数は56.2回で、浅野ら<sup>1)</sup>の分析による平成3年度の全日本学生選手権大会での62.8回より少なかった。また同分析では、ミス率は勝者が22.5%で敗者が30.9%と報告されており、本研究の分析結果は約30%で敗者のものと近い値であった。攻撃回数が約1分に1回でおこなわれていることは、2チームあわせて考えると、1回の攻撃に要する時間は約30秒であり、その時間内で攻撃を組み立てることが重要であることが示唆された。

攻撃回数は遅攻のほうが速攻よりも約4倍多いが、攻撃成功率の点からみても、速攻の方が約10%高く、またシュート成功率も速攻の方が約15%高かった。速攻は相手守備が組織される前に攻撃できる利点があり、速攻攻撃を増加させることが勝利に近づく可能性が示唆された。

試合でなされたシュートは、約5割が失敗に終わっていた。シュートがリバウンドボールとしてコート内に転がってくるのは約3割であった。特にフィールドにリバウンドしてくるものは21.5%あり、総攻撃回数に占める割合は15.6%で、このことはつまりリバウンドボールの処理により1試合の攻撃回数が約10回も変わってくることをあらわしており、勝敗に影響を十分に与えていると考えられた。

リバウンドボールが、どこに転がっていくかは、全体ではコート中央が多かった。フィールドにリバウンドしたボールは、コート中央から外側に行くにしたがってその本数を減らしていった。つまりリバウンドの処理を確実にこなうためには、中央にプレイヤーを配置することが大切であることが示唆された。ボールのリバウンドしたエリアをシュートのなされたエリアごとにとみると、ゴール近距離のシュートにはエリアによる本数に大きな違いはみられなかった。遠距離シュートに着目

してみると、エリア2からのシュートは、エリアIV・Vへのリバウンドが多く、エリア4からのシュートによるリバウンドは、エリアI・IIが多く、シュートのなされた反対側エリアにプレイヤーを配置することが、リバウンドボール処理のため有効である可能性が高いことが示唆された。

シュートミス後の展開は、相手シュートが枠外もしくはゴールキーパーのセービングにより、ボールがゴール後方に転がった場合、速攻より遅攻の展開が多かった。これはゴール後ろにはスペースがあり、キーパーがボールを処理するのに時間を要したことが大きく影響していたと考えられた。またリバウンドしてフィールドに転がったボールの約3割が再び攻撃側のものとなり、守備側は再攻撃の機会を獲得されており、守備側はリバウンドボールの処理をより意識しなくてはならないと考えられた。フィールドでリバウンドボールを獲得した場合約5割、ゴールエリア内でリバウンドボールを獲得できた場合には約7割もの高い確率で速攻に展開していた。すなわち、リバウンドボールを確実に処理することは、遅攻よりも攻撃およびシュート成功率の高い速攻をより多く展開できる機会を増加し、試合における勝利の確率を高める可能性があることが示唆された。

#### 引用・参考文献

- 1) 浅野幹也, 犬塚秀幸, 小山哲央, 藤松博: ハンドボール競技におけるゲーム分析, 中京大学体育学論叢, 33(2): 47-53, 1992.
- 2) 犬塚秀幸, 浅野幹也, 小山哲央: ハンドボール競技のゲーム分析, 中京大学体育学論叢, 40(1): 85-97, 1998.
- 3) ヒューゴー・デーブラ著: 谷釜了正, 稲垣安二, 上平雅史訳: 球技運動学, 28-29, 不昧堂出版, 1985.
- 4) 水上一, 大西武三, 河村レイ子: 第12回世界女子ハンドボール選手権でのゲーム分析, 筑波大学運動学研究, 13: 41-49, 1997.
- 5) 笹倉清則, 難波俊夫: 世界のハンドボールにおけるプレイヤーの形態の変化と戦術の変遷に関する運動学的考察, 日本女子体育大学紀要, 23: 19-31, 1993.
- 6) ヤーン・ケルン著: 朝岡正雄, 水上一, 中川昭訳: スポーツの戦術, 23-29, 大修館書店, 1998.